

「スクールカースト」における中学生の対人関係と いじめ現象

Junior High School Student's Interpersonal Relatedness and School Bullying in "School Caste"

作 田 誠一郎

抄 録

本稿は、近年学校教育において注目されている「スクールカースト」について中学生を対象に対人関係および対人意識からその特徴を明らかにすることを目的とする。中学生の全体的な傾向として、私事的で排他的な対人意識の特徴とともに利他的な対人意識が認められた。このような対人意識の特徴を踏まえて「スクールカースト」の有無と性別等の影響について考察したところ、「いじめた」および「いじめられた」といういじめ経験が影響の一つとして抽出された。いじめ経験と「スクールカースト」の認識（クラス内に存在する）の関連は、いじめ経験に伴う対人トラブルが表出したものと考えられる。特に「スクールカースト」の存在を意識し、いじめ経験がある生徒は、不登校傾向（学校外の生活がよく登校したくない）も認められた。

キーワード：スクールカースト、いじめ経験、対人意識

1. 問題設定

本稿の目的は、中学校における「スクールカースト」から中学生の対人意識および対人関係について考察し、その特徴について明らかにすることである。その際に、学校社会における対人関係の問題として取りあげられるいじめ現象と「スクールカースト」との関連についても分析したい。

いじめ現象については、平成25年に「いじめ防止対策推進法」が公布されたことが記憶に新しい。その概要をみると、各学校において「いじめ防止等のための対策に関する基本的な方針」の策定が義務づけられ、地方公共団体は、関係機関等の連携を図るために学校をはじ

めとして、教育委員会や児童相談所、法務局や警察などにより構成される「いじめ問題対策連絡会議」を置くことができることになった。また、いじめの防止等に対する学校の措置として、いじめに対する組織を置き、いじめの事実確認やいじめを受けた児童生徒またはその保護者に対する支援、そして、いじめを行った児童生徒に対する指導またはその保護者に対する助言について定めることが示されている。さらに、いじめが犯罪行為として取り扱われるべきものであると認められるときには、所轄警察署と連携することも加えられた。

その後、文部科学省の調査によって、2014年度に全国の小中高校などにおいて認知されたいじめの解消率が88.7%であったと発表された。

しかし、いじめの解消率においては、「被害者が心身の苦痛を感じなくなった状態」（熊本県）や「被害者と加害者と双方の両親が解消と認めた場合」（長崎県）など、都道府県ごとに異なる基準が設けられており疑問視する意見もある（『西日本新聞』2015.11.7朝刊）。

ここでいじめ現象に対する研究について概観したい。これまでいじめ現象に対して社会的な研究によって多くの知見が得られている。そのなかで、森田・清永の『いじめ—教室の病い』（1994）では、従来のいじめる側といじめられる側の構造から、人間関係を中心にいじめ行為を取り巻く「観衆」（はやし立てるなど）と「傍観者」（見てみぬふりをするなど）を加えた「四層構造」を明らかにすることで、いじめ現象に対する視点を構造的な側面から解き明かしている。また、内藤（2009）は、いじめ現象における「中間集団全体主義」の概念を提示し、学校という組織や集団を中間集団として捉え、その学校空間における締め付けや圧力等の秩序的なしがらみに着目して、加害者であるいじめる側の発生過程について分析している。

さらに、近年いじめ現象において注目されている視点であり、クラス内の地位に注目した「スクールカースト」の研究について見てみたい。森口（2007）は、クラス内におけるコミュニケーション能力について注目し、結果としてクラス内のポジションの獲得における差異を「スクールカースト」として指摘している。同様に「スクールカースト」について鈴木（2012）は、中学校・高等学校のクラス内におけるヒエラルキーであり、その認識は、「グループ間」の地位の差であるという。しかし、上位グループと下位グループとのかかわり自体は「いじめ」ではないが、両者間の「空気」の読み合いのなかでキャラクターが固定化し、そのなかで自分の地位を上げるための戦略が展開されているという。しかも、教師も学級経営戦略への利用という側面や生徒間の「地位の差」を「能力」のヒ

エラルキーとして解釈することから「スクールカースト」の維持に拍車をかけると指摘している。同書の解説において本田は、クラス内における自然発生的な「スクールカースト」における「『なんとなく下に見られているような感覚』が生み出されるメカニズム」（同書：294）の検証の必要性について論じている。つまり、「スクールカースト」は、いじめ現象と培地であり、連続する関係にあることから今後重要な課題となると指摘している。また、同書において鈴木は、「スクールカースト」の認識について小学校時においては「個人間」の地位の差として認識されているのに対して、中学・高校時においては「グループ間」の地位の差として認識されていると言及している。

本論においては、中学生のアンケート調査から「スクールカースト」の有無に着目したい。なぜなら「スクールカースト」という現象は、クラスという特殊な集団（年齢やカリキュラム等が制度下において画一的に構成されている）において自然発生的に形成された上下関係であると捉えれば、その「スクールカースト」の存在自体の認識に個人差があると思われるからである。同質性が高いなかで学校社会の制度的な評価が序列化されれば成績の上下関係は顕在化する。しかし、「スクールカースト」は対人関係の細かな社会的相互作用を通じて、成績以外の潜在化している多様な生徒間の評価および対人関係も加味され認識されると考えられるからである。そのような仮説の下で、「スクールカースト」を認識する生徒としない生徒の対人関係や対人意識の特徴を知することは、その後に顕在化するいじめ現象の要因を考察するうえで有益であると思われる。その点に注目しながら「スクールカースト」の特徴について明らかにしたい。

2. 調査対象およびデータの概要

調査期間および対象としては、2014年12月から2015年1月の期間にX県内のY市立中学校の3校において2年生を対象に調査票を配布して記入してもらう集合調査法を用いた。全体のサンプル数は357である。また男女比は、女性179 (50.1%)、男性178 (49.9%)である。

本調査の中心は、「スクールカースト」の背景にある対人関係および対人意識について考察することになる。友人関係においては岡田(1995)による友人関係尺度に独自に個人主義的な傾向を掴むための項目を加えて25項目からなる質問項目を作成した。それぞれの項目においては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法で回答を求めた。

数量化Ⅲ類型において使用した質問項目は、「A1 一人で好きなことをやっている方が好き」「A2 人と付き合う時どう見られているか気になって疲れる」「A3 相手の考えていることに気をつかう」「A4 間違っただけは許すことが大切だ」「A6 たいていのことなら他の人と同じくらいできる」「A7 相手が言うことに口をはさまない」「A8 いつも自分の行動を振り返りよくしようと思う」「A9 親しい人たち以外の人の考え方や行動に興味がない」「A10 人から認められないと不安」「A13 ウケるようなことをよくする」「A14 一人の友だちと親しくするよりグループで仲良くする」「A16 お互いを傷つけないように気をつかう」「A17 人には付き合って得をするのと損をするのと2種類ある」「A18 みんなで一緒にいることが多い」「A20 友だちと真剣に議論することがある」「A22 友だちづきあいのなかで『場の空気が読める』ことは重要だ」「A24 楽しい雰囲気になるように気をつかう」「A25 自分を犠牲にしても相手につくす」「A26 相手に甘えすぎない」「A27 友だちグループのためにならないことは決して

しない」「A28 友だちに心を打ち明けている」「A29 お互いの領分に踏み込まない」「A30 冗談を言って相手を笑わせる」「A32 お互いのプライバシーには入らない」「A33 約束は決してやぶらない」¹⁾である。

3. 分析結果

(1) 全体的な対人傾向

はじめに数量化Ⅲ類において友人関係の全体的な傾向を掴むために得点平均の比較を行いたい。各軸の固有値、寄与率、累積寄与率、相関係数は表1に示した。

各軸についての説明であるが、第1軸は、一人を好みながら周囲の人間関係を気づかっている。しかし、グループで仲良くするおよび集団のなかで群れて自らの存在を主張しウケる行動をする項目がマイナスの数値を示していることから、私的な孤独指向として読み取れる(図1)。また第2軸は、相手の言うことに口をはさまないおよび人から認められないと不安が他の項目よりも突出してマイナスの値を示しており、かつ集団で自らの存在を主張するウケる行動をする項目がプラスに高い値を示していることから集団のなかで自己の存在を主張する指向の軸とした(図2)。

第3軸は、親しい人以外に興味がないという親密な人間関係を重視する傾向が認められることから排他的な親密指向が読み取れる(図3)。

表1 各軸の固有値、寄与率、累積寄与率、相関係数

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第1軸	0.0770	12.92%	12.92%	0.2775
第2軸	0.0664	11.14%	24.07%	0.2577
第3軸	0.0511	8.57%	32.64%	0.2260
第4軸	0.0402	6.74%	39.38%	0.2005

図1 私事的な孤独指向の軸 (第1軸)

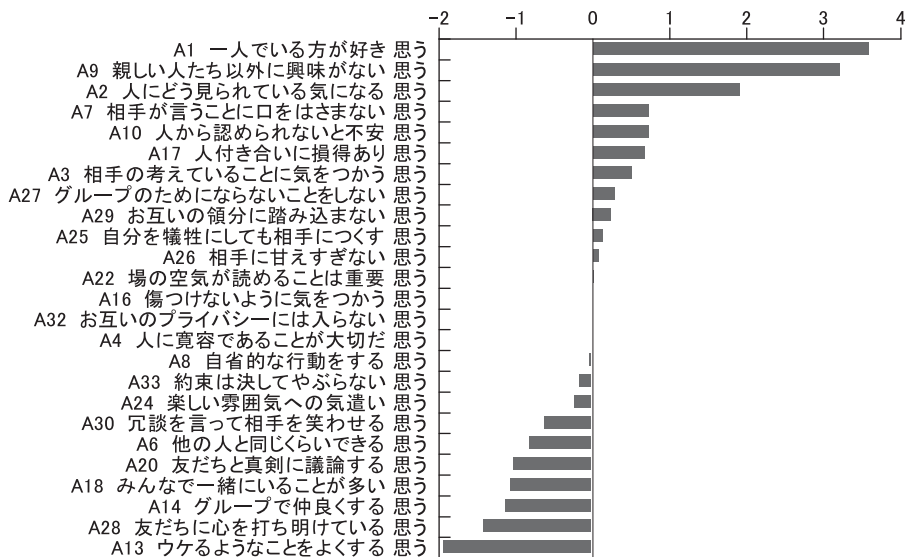
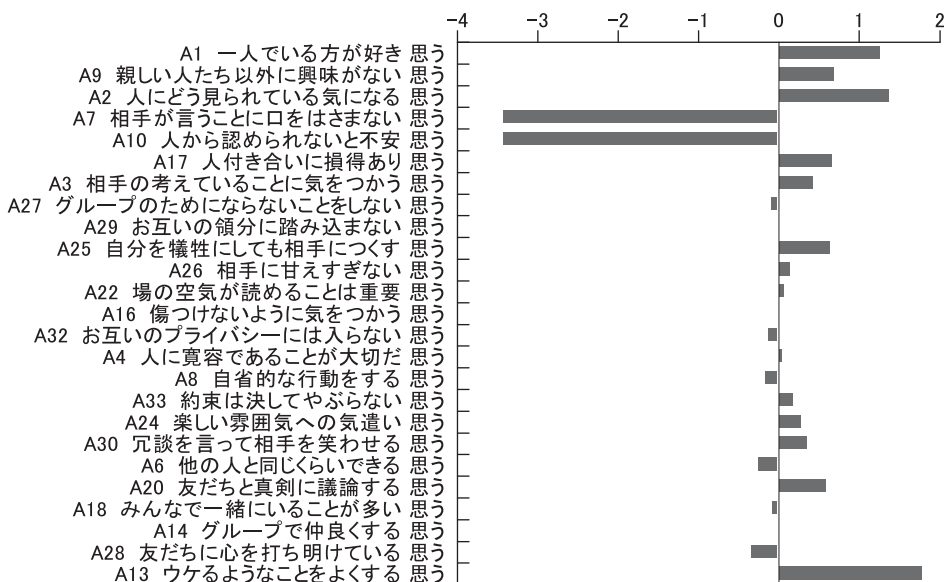


図2 集団内の存在主張的指向の軸 (第2軸)



また第4軸は、自分を犠牲にしても相手につくす利他的な傾向およびグループのためにしないことをしない傾向が強くあらわれ、一人でいる方を好む項目がマイナスの値を示していることから、利他的な集団重視の指向として読み取れる(図4)。

各属性およびいじめの有無のサンプル得点平

均は表2のとおりである。

図2から特徴的な結果として、性別において女子の平均得点は男子の平均得点にくらべて第1軸(私事的な孤独指向)がプラスの値(0.11)であり、男子はマイナスの値(-0.08)を示している点があげられる。一方、第3軸(排他的な親密関係重視)は、男子がプラスの値(0.15)

図3 排他的な親密関係重視の軸（第3軸）

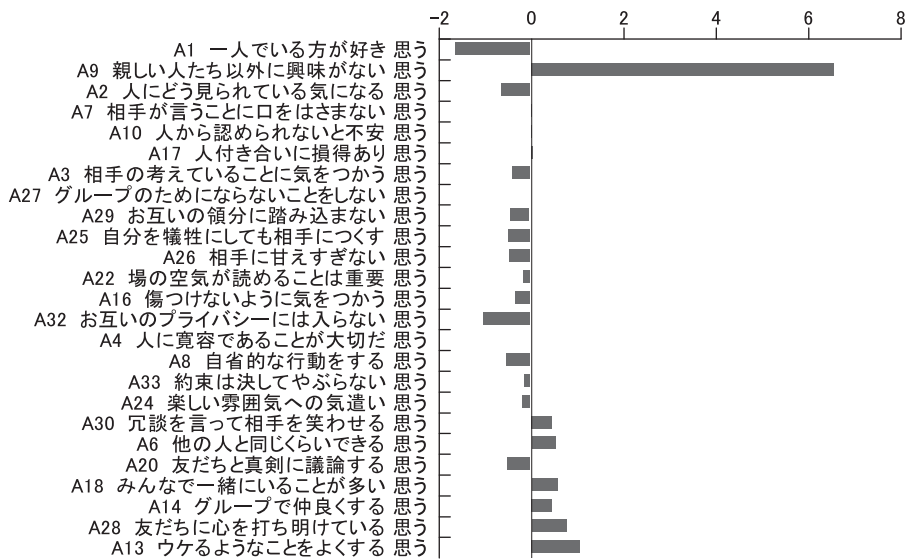
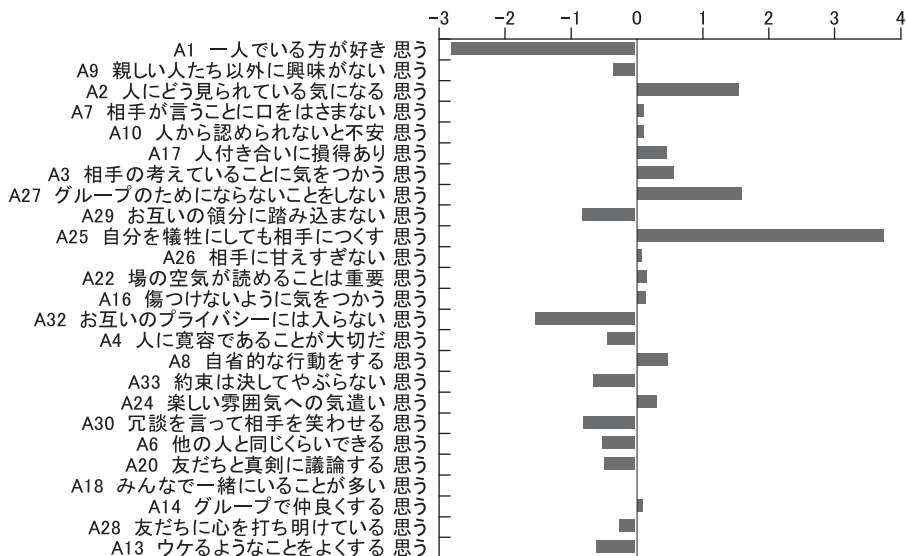


図4 利他的な集団重視指向の軸（第4軸）



を女子はマイナスの値（-0.10）が認められる。また、家族構成において核家族の生徒は、第4軸（利他的な集団重視指向）の値が他の軸とくらべて低い結果となった。部活動の所属の有無については、所属していない生徒が所属している生徒にくらべて第1軸と第2軸（集団内の存在主張的指向）において高い値として示された。

しかし、部活という集団に所属するためか部活に所属していない生徒にくらべて所属している生徒は第4軸の値が高いことがわかる。

いじめとの関連については、「最近、クラスや部活等でいじめられたことがある」および「最近、クラスや部活等でいじめたことがある」に対してそれぞれの回答についてみたところ、い

じめた生徒は第3軸の平均値がいじめていない生徒にくらべて他の軸の平均値の開きをくらべても高い値を示している。それに対して、いじめられた生徒については、第3軸の開きよりも他の軸の開きがプラスの値としてあらわれている。特に第1軸については、他の軸の値にくら

べて高い値を示している。

ここまでは、中学生の対人関係および対人意識の全体的な傾向とそれぞれの属性およびいじめ現象の関連をみてきた。次に「スクールカースト」の有無と対人意識に着目して考察したい。

表2 属性別におけるサンプル得点平均

	女子	男子	核家族	直系・ 複合家族	部活所属 している	部活所属 していない	いじめら れた	いじめられ ていない	いじめた	いじめて いない
第1軸	0.11	-0.08	0.03	-0.10	-0.02	0.49	0.48	-0.03	-0.02	0.01
第2軸	0.07	0.02	0.08	-0.10	0.02	0.49	0.24	0.02	0.13	0.03
第3軸	-0.10	0.15	0.06	-0.12	0.01	0.11	0.09	0.02	0.21	0.01
第4軸	-0.05	-0.12	-0.12	0.05	-0.06	-0.59	0.24	-0.12	0.02	-0.10

(注) 注目される数値を太字で示した

表3 クラス内の性別における「スクールカースト」の有無と対人意識

	選択肢	女子		男子		
		スクールカー ストあり	なし	スクールカー ストあり	なし	
人と付き合うとき、どう見られているのか気になって疲れる	そう思う・どちらか といえばそう思う	70.3	41.1	37.8	34.1	***
ウケるようなことをよくする	そう思う・どちらか といえばそう思う	40.6	28.2	54.5	35.7	**
安心して話せる友だちがいない	そう思う・どちらか といえばそう思う	29.2	19.8	30.4	9.4	**
人には付き合って得をするのと損をするのと2種類ある	そう思う・どちらか といえばそう思う	92.2	62.4	65.2	63.8	**
友だちから上から目線でものを言われるとむかつく	そう思う・どちらか といえばそう思う	75.0	45.0	51.1	53.5	**
友だちと遊んでいるとき、自分だけが浮いていないか不安になる	そう思う・どちらか といえばそう思う	72.3	47.3	43.5	36.2	***
クラスや部活動等がいじめられた	そう思う・どちらか といえばそう思う	21.5	3.6	13.0	3.1	***
学校以外での生活の方が充実している	そう思う・どちらか といえばそう思う	61.5	39.3	60.9	46.1	**
クラスや部活動等がいじめたことがある	そう思う・どちらか といえばそう思う	12.3	1.8	17.8	5.4	**

(注) *p<.10 **p<.05 ***p<.001, 注目される数値を太字で示した

(2) クラス内における「スクールカースト」の有無と対人意識

ここでは、対人意識を中心に「スクールカースト」についてみてみたい。表3は、クラス内の「スクールカースト」について、男女別にその有無と対人関係に関する変数のなかで特徴的なものをクロス集計した結果である²⁾。

この結果から、女子の「スクールカースト」が「ある」と答えた生徒においては、他の属性（男子および「スクールカースト」なしの女子）とくらべて他者の視線に対する気疲れや不安感、他者に対する損得勘定などが高い傾向にある。

男子の「スクールカースト」が「ある」と答えた生徒は、「ウケることをする」などが高い傾向にある。さらに注目すべき点として、「スクールカースト」がクラス内に「ある」と答えている生徒は「ない」と答えている生徒にくらべて、「安心して話せる友だちがいない」の項目が高く、いじめ経験があり、学校以外の私的な生活に充実感を得ていることが特徴として認められる。やはり、「スクールカースト」の存在を認識している生徒においては、その対人意識やいじめ経験（「いじめた」および「いじめられた」）との関連がありそうである。

表4 使用する変数の説明

女子ダミー	女子=1, 男子=0
核家族ダミー	核家族=1, 直系家族・複合家族=0
部活所属ダミー	入っている=1, 入っていない=0
グループ重視ダミー	「一人の友だちと特別親しくするよりは、グループで仲良くする」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」とした回答=1, 「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わない」とした回答=0
いじめられたダミー	「最近、クラスや部活等でいじめられた」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」とした回答=1, 「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わない」とした回答=0
いじめたダミー	「最近、クラスや部活等でいじめた」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」とした回答=1, 「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わない」とした回答=0
対人利己的ダミー	「人にはつきあって得をするのと、損をするのと2種類あるように思う」を「思う」とした回答=1, 「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わない」とした回答=0
利他的ダミー	「自分を犠牲にしても相手につくす」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」とした回答=1, 「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わない」とした回答=0
能力主義的ダミー	「能力がない人は、よい生活ができなくて当然だ」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」とした回答=1, 「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わない」とした回答=0
フラット化ダミー	「友だちから『上から目線』でものを言われるとむかつく」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」とした回答=1, 「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わない」とした回答=0
不登校傾向ダミー	「できれば学校に行きたくない」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」とした回答=1, 「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わない」とした回答=0

(3) 「スクールカースト」に対する属性およびいじめ現象の影響

次にロジスティック回帰分析を用いて「スクールカースト」とクラス内における対人意識（価値観）およびいじめ経験の影響についてみてみたい。

使用する変数については表4のとおりである。調査項目は、属性の他にいじめ現象に関する項目、人づきあいに関する項目、対人関係における価値観に関する項目、学校に関する項目を問うものを用意した。

「スクールカースト」が「ある」との回答をサンプルとして用い、表4の各変数を強制投入法により投入し、表5の結果を得た。

結果として、対人利己的ダミーが「スクールカースト」の有無に有意な負の影響を与えて

いることがわかる。Exp(B)は.382であることから、対人利己的な意識があるものはないものにくらべて「スクールカースト」が「ある」と答えるリスクが減っていることがわかる。つまり、損得勘定を前提とするような対人関係の意識があるものがないものにくらべて「スクールカースト」が存在するという認識にプラスの影響を与えていることがわかる。同様にいじめられたダミー（Exp(B)=.300）およびいじめたダミー（Exp(B)=.309）についても、有意な負の影響を与えていることから、いじめ経験が「スクールカースト」の存在の認識にプラスに影響を与えている。この傾向は、不登校傾向ダミー（Exp(B)=.523）についても同様の結果が得られた。

「スクールカースト」の有無については、いじめ経験や不登校傾向の意識、利己的な意識が有意な負の影響を与えていることがわかる。

表5 「スクールカースト」におけるロジスティック回帰分析結果

	B	標準誤差	Exp(B)
女子ダミー	-.398	.260	.671
核家族ダミー	.350	.314	1.419
部活所属ダミー	.012	.492	1.012
能力主義的ダミー	-.398	.317	.672
グループ重視ダミー	.288	.270	1.334
対人利己的ダミー	-.962	.299	.382 ***
フラット化ダミー	-.415	.259	.660
利他的ダミー	.261	.259	1.298
いじめられたダミー	-1.203	.453	.300 **
いじめたダミー	-1.174	.504	.309 *
不登校傾向ダミー	-.647	.291	.523 *
定数	2.498	.696	12.163
-2 対数尤度	388.191 ^a		
Cox-Snell R ²	.141		
Nagelkerke R ²	.199		
N	352		

*p<.05; **p<.01; ***p<.001

(4) いじめ経験からみる「スクールカースト」と対人意識

前記のロジスティック回帰分析の結果から、「スクールカースト」の有無に対していじめ経験は他の属性にくらべて影響を与えていることが明らかになった。最後に「スクールカースト」の有無といじめ経験の有無からその特徴についてみてみたい。その際に「スクールカースト」の有無といじめ経験の有無をそれぞれ「SC・経験あり」「SCなし・経験あり」「SCあり・経験なし」「SC・経験なし」の4つに分類して以下の質問項目に対してクロス集計を試みた³⁾。

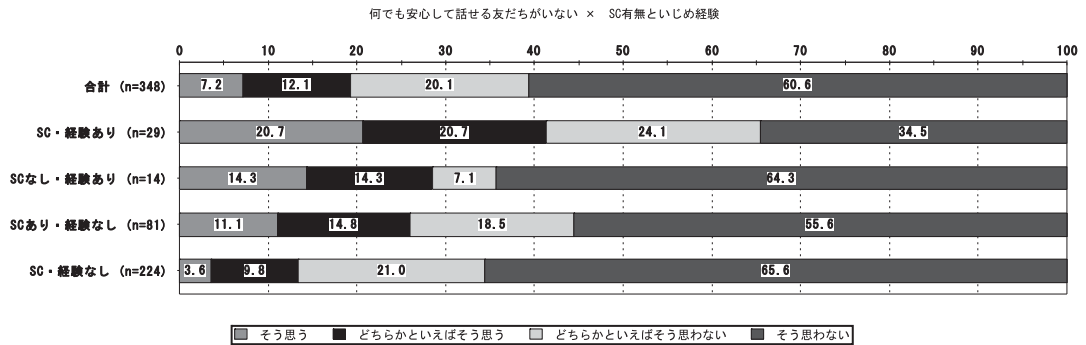
図5は、安心して話せる友だちの有無に対して上記の4類型を用いたところ、「SC・経験あり」が他の類型の中で最も高い値を示している。それに対して、最も低い値は「SC・経験なし」であった。

次に友だち付き合いのなかで、周囲から浮いていることへの不安に対する項目を4類型でみたところ図6の結果が得られた。

図6からもわかるように、「SC・経験あり」が他のタイプのなかで最も高い値を示しており、それに対して最も低い値は「SC・経験なし」

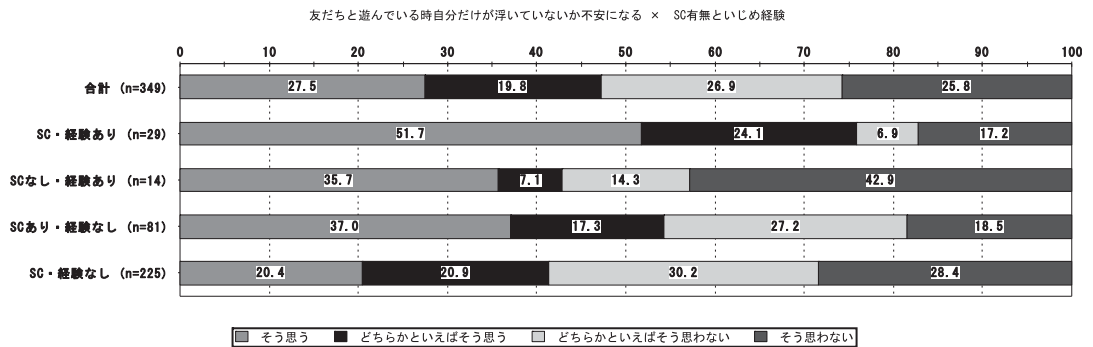
であった。特に「SC・経験あり」については、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた値が8割近くを占めている。

図5 親友の有無と4類型



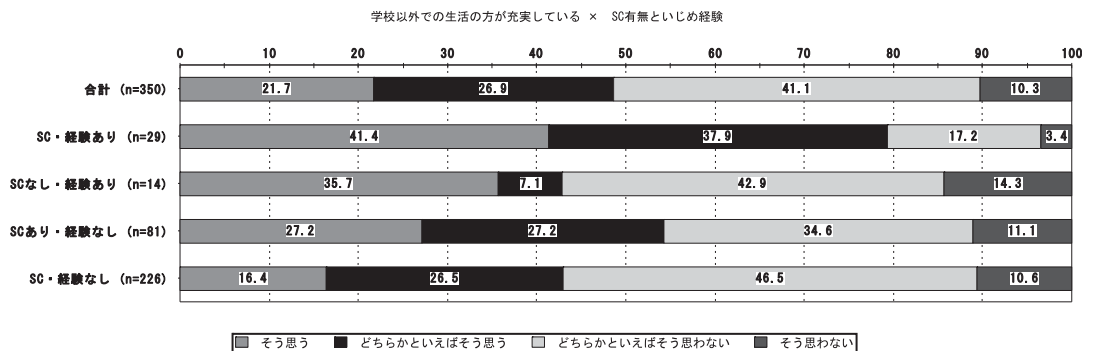
$\chi^2(df=9, N=348) = 23.5981 \quad p=.000$

図6 友人関係の不安と4類型



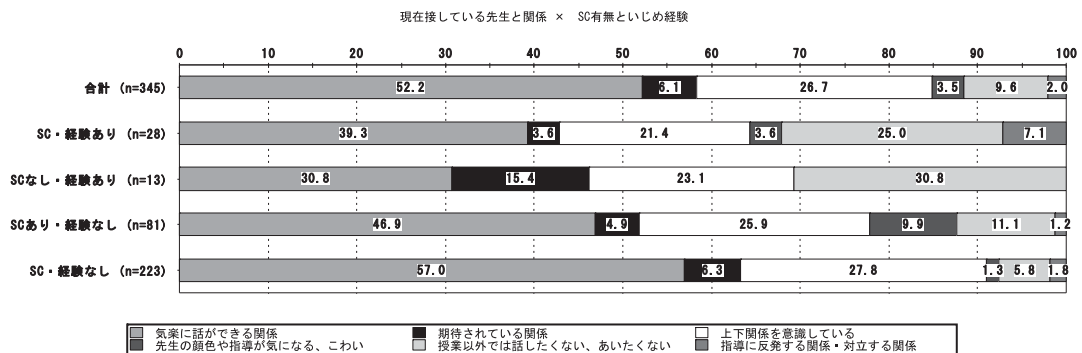
$\chi^2(df=9, N=349) = 25.8228 \quad p=.000$

図7 学校以外の生活充実と4類型



$\chi^2(df=9, N=350) = 21.9214 \quad p=.000$

図8 教師との関係と4類型



$\chi^2(df=15, N=345) = 39.8684 \quad p=.000$

図7は、学校以外の生活の方が充実しているという項目に対して4類型を用いた結果である。他の類型よりも「SC・経験あり」の類型が最も高く、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた値が8割を占めていることが特徴として見出される。

最後に、現在接している先生との関係に対して4類型を用いて得た結果が図8である。

この結果から、「SC・経験あり」は「SCなし・経験あり」とともに「(先生と)授業以外では話したくない、あいたくない」が他の2つの類型とくらべて高い値を示している。これは、いじめ経験が影響していると思われる。

この分析から、身近な友人関係の付き合いやそのなかでの不安が学校生活の不満へとつながり、その値が最も高くあらわれたのが4類型のなかで「スクールカースト」を認識し、かついじめ経験を有する生徒であることがわかった。

4. まとめ

本考察では、中学生の「スクールカースト」と対人関係の特徴を明らかにし、そのなかでもいじめ現象が「スクールカースト」の認識に影響を与えていることがわかった。中学生の全体的な対人意識の特徴には、私事的で孤立的な傾向とともに集団内における自己の主張や島宇宙

的で排他的な親密関係を重視する傾向が認められた。また私事的傾向とは対極的な利他的な集団重視の指向も見出され、学校やクラスにおける中学生の多様で入り組んだ対人意識が読み取れた。性別を中心とした分析では、「スクールカースト」の存在を意識している女子において、人づきあいの際に他者の視線や不安が強くあらわれており、男女ともにいじめ経験が「スクールカースト」を認識していない生徒にくらべて高い値を示していた。対人的な関係性に伴う気疲れやいじめなどの対人トラブルに対して、学校以外の環境を求める傾向も読み取れることから、「スクールカースト」の存在には対人意識のマイナス的な側面(不安や疲れなど)が関わっていることが認められた。さらにロジスティック回帰分析においてもこの傾向は、同様の結果が得られた。最後に、「スクールカースト」を認識しており、かついじめ経験があるものの特徴を探ったが、性別における分析にみた「スクールカースト」を認識している生徒の特徴は、いじめ経験を分析の中心に据えることでいじめ現象との関連が強いことが認められた。

後期近代社会において、加速するグローバル化の進展とともに社会的仕組みやアイデンティティの流動化は激しさを増し、人びとは先行きの不安やそれに対するリスクを常態的に意識せざるを得ない状況下に置かれている。このよう

な現代社会に生きる中学生は、対人意識においても私事的で親密的な意識と持ちつつ利他的な集団主義的傾向も併せ持っている。一見すると矛盾するようなこの対人意識は、自省的で常に状況に対応せざるを得ない現代人に共通する「生きる術」とも受け取れる。しかし、閉鎖的な学校社会（特にクラス）で多くの時間を過ごす中学生は、いじめ現象にみられるような対人トラブルを経験し、表層的に均衡が保たれているかのように維持されていた対人意識に影響をおよぼされ、より一層不安や疲れを伴い自省的にかつ他者の言動をモニタリングする対人意識を強める傾向へシフトしているのではないだろうか。つまり中学生において「スクールカースト」という存在は、いじめ現象をはじめとする対人トラブルのなかで、不安や他者への過剰な注視が当事者の意識に立ちあらわれてきた結果なのかもしれない。

今回は中学生を対象としたが、小学生から高校生までの広範な調査対象を分析することにより、日本の学校社会における「スクールカースト」現象がどのような特徴の変化を示し、児童生徒の意識としてあらわれてくるのか、さらなる検証を進めていかなければならない。

注

- 1) 数量化Ⅲ類においては、「思う」のみ（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を統合）を用いている。
- 2) 「スクールカースト」に関する項目は学校生活において「クラスの中で、成績だけではない人間関係のランキング（上下関係）がある」の設問を用意し、「そう思う」（12.8%）、「どちらかといえばそう思う」（18.8%）、「どちらかといえばそう思わない」（21.9%）、「そう思わない」（46.6%）の4件法により回答を求めた。本分析では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「ある」とし、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「なし」とそれぞれを統合した。
- 3) いじめ経験の有無については、はじめに「最

近、クラスや部活等でいじめられた」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「いじめられた経験あり」とし、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「いじめられた経験なし」とした。また「最近、クラスや部活等でいじめた」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「いじめた経験あり」とし、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「いじめた経験なし」とした。さらに「いじめられた経験あり」と「いじめた経験あり」、「両経験あり」を「いじめ経験あり」とし、「いじめられた経験なし」と「いじめた経験なし」を「いじめ経験なし」に統合した。また、「スクールカースト」は「SC」と略し、「SC いじめ経験」4 類型と名付ける。

引用・参考文献

- Beck Ulrich, Giddens Anthony, Lash Scott, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity Press. (= 1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房.)
- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房.
- Foucault, M., 1975, *Surveiller et Punir Naissance de la Prison*, Paris: Gallimard. (= 1977, 田村俊訳『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社.)
- Goffman, E., 1968, *Asylums, Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, Harmondsworth Pelican Books. (= 1984, 石黒毅訳『アサイラム』誠信書房.)
- 本田由紀, 2011, 『学校の「空気」』岩波書店.
- 宮台真司, 1994, 『制服少女たちの選択』講談社.
- 森口朗, 2007, 『いじめの構造』新潮社.
- 森田洋司・清永賢二, 1994, 『いじめ—教室の病い（新訂版）』金子書房.
- 内藤朝雄, 2001, 『いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体』柏書房.
- , 2009, 『いじめの構造—なぜ人が怪物になるのか』講談社.
- 岡田努, 1995, 「現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察」『教育心理学研究』5: 43-55.
- 鈴木翔, 2012, 『教室内カースト』光文社.

滝充, 1992, 「“いじめ” 行為の発生・推移状況に関する実証的研究—“いじめ” 行為の恒常化と加害・被害経験の一般化」『教育学研究』59(1): 113-123.

竹川郁雄, 2006, 『いじめ現象の再検討—日常社会規範と集団の視点』法律文化社.

(さくた せいいちろう

佛教大学現代社会学科)